

## 4 蔡元培と近代中国の教育改革

蕭 超 然

この度、日本の国際日本文化研究センターと北京大学日本研究センターが共同して主催する「東アジア近代化の指導者」シンポジウムは、意味のある学術活動である。ここで、私は教育改革の角度から蔡元培という歴史人物の中国近代化の過程の中における地位と作用について、簡単な論述を試みる。

周知のとおり、蔡元培は中国近現代の偉大な人物である。かれは教育家であり、また革命家であり、思想家でもある。かれの思想、学問、道德、業績はいまでも人々の仰ぐものとなっている。中国古代では人を評価する際、「三不朽」というのがある。一人の人間としては、徳を立て、功を立て、言を立てるべきという。この三つの方面において、もし一つの方面でも成功を見せると、即ち素晴らしいことで、つまり「不朽」である。もし三つの方面とも成功したら、さらに素晴らしい。「三不朽」と称される。今日、我々が完全に言えるのは、蔡元培がすなわち、こうした「三不朽」の巨人であるということである。

七年前に、つまり1988年10月、私は北京大学代表団員の一人として、香港の蔡元培誕生120周年記念の学術活動に参加し、かつて香港中華文化センターにおいて、ひとつの講演をしたことがある。テーマは『蔡元培 —— 中国近現代歴史におけるもっとも偉大な教育家』であった。当時、私は哲学者馮友蘭先生の蔡元培に対するひとつの評価、即ち「蔡先生は中国近代における最大の教育家である」という説を強調した。馮先生は「蔡先生は中国近代の大教育家というのは、人々の認めるところだが、私は大の字の上に、さらに一つの最の字を加えた。というのは、現在に至るまで、私はまたもう一人の蔡先生のような大教育家を見つけていないからだ」という（『私が認識した蔡子民先生』、『人民日報』海外版、1988年1月9日）。私は大いにこの評価に同意する。私はまた仮に中国古代のもっとも偉大な教育家が孔子であるとすれば、中国近現代のもっとも偉大な教育家はつまり蔡元培であるとする。蔡元培は古代の孔子の後を継いで一人で中国近代文壇を歩み渡した教育巨匠であると考えている。

近代化というと、まず思想のことに触れなければならない。というのは思想の変化が、その他の全ての変化を誘発する前提だからである。従って、我々は中国の近代化を研究するにあたって、中国に生活している人々の思想の発展変遷の軌跡、即ちその思想観念が古代から近代に入った軌跡を考察しなければならない。但し一つの国や社会における人々の思想観念の普遍的な更新は、主に学校から教育を受けることによって得るものであった。学校は往々にして各種の新思想、新観念がもっとも起こり易く、繁殖し伝播しやすいところであり、同時に、有効に人々に思想系統を転換させ、知識を伝授するところである。これはつまり、全体から見ると、また社会群体の思想変遷からみると、国の学校教育の近代化がなければ、人々の思想観念の普遍的な近代化を有しがたく、人々の思想観念の普遍的な近代化がなければ、国家の近代化、即ち国家建設の各方面での近代化を実現することは出来ない。ここから、教育の近代化は、国家の近代化過程における地位が如何に重要だったかが分かる（今日我々が現代化を研究する際にも、その道理は基本的に同じである）。しかし蔡元培はまさに中国の教育を古代から近代に持ち込んだ最も偉大な先駆者である。

蔡元培は早年光復会を創立し、同盟会に参加して、清朝封建制支配反対の闘争に力を入れた。故にかれは一人の革命家である。蔡元培は博学で見聞が広くて、明辨審思で、数多くの学術分

野のなかで、たとえば文学、歴史学、哲学、倫理学、政治学、美学、教育学、科学技術等にわたって、少なからざる創造的な意見を発表し、新しい思想を提出している。故にかれはまた思想家である。しかもその思想の広さ、包容性と深さから見れば、かれをまた多次元的な思想家と称することもできる。しかし、もしわれわれがかれの生涯の言行、或いはかれの思想的内部について、一つの比較や洞察をするならば、かれの生涯における主な経歴がやはり教育方面にあったこと、しかも、その思想のなかの最も精華的で、もっとも真理性を持つ部分も、やはり教育に属していることがわかる。かれは民国初期の中国の初めての共和政府の第一任教育総長に任じられたことがあり、また五・四時期の北京大学学長と30年代の南京中央研究院長をも任じたことがある。これらは皆極めて挑戦的で、大きな才能のない人には向かない職務であった。他に例えば交通大学長、中国教育会長、北京図書館長等も、皆かれの一生における重要な経歴であった。これは蔡元培が教育、学術界において長期にわたる勤務実践を有し、教育、学術を指導し管理する豊富な経験を積んでいたことを示し、これはまさにかれをして中国近代の最も偉大な教育家に浮き彫りさせた条件であった。

蔡元培の中国近代教育における改革と革新は、実に中国教育史上に見る輝かしい一章であり、その大学教育に付与した樹立は、もっとも影響が深くて遠い。ここでその教育をめぐる改革の措置の主なものについて、次のように紹介し論述してみる。

一、まず生徒の全面的な成長を促す方針を提出した。教育方針というと、われわれはすぐ毛沢東の広く知られた有名な言葉——「われわれの教育方針は、教育されるものをして、徳育、智育、体育のいくつかの方面において、皆発育を得させることである。…」を思い出すであろう。実は、毛沢東の前に、同じ表現は、中国近代において少なくとも、二人の先輩賢人が既にそれを口にした。その一人は嚴復で、もう一人が即ち蔡元培であった。嚴復は1906年の環球中国学生会における一つの講演の中で、「教育を講ずるものは、その事業を常に三つの方面に分けることができる。即ち体育といい、智育といい、徳育という。三者はともに重要である。教育を司るものは、すなわち必ず時の勢いをわきまえた上に、その重か軽かを決める。故に今についていえば、私は智育が体育より重要だとし、徳育が智育よりまた重要だと考えている。」（『嚴復集』第一冊、中華書局、1986年版、167頁）。嚴復はこのような論述をした後に、また「諸公（講演の聴衆を指す——作者）は、この話を聞いて、恐らく私の言うことを外的の議論と思うかも知れないが、細かく分析してもらいますと、諸公はみずからその理を易えることができないのを知るであろう」（『嚴復集』、167頁）という。嚴復は講演のなかで徳育、智育、体育の三者が共に重要で、しかも徳育が智育より優先で、智育が体育より優先するという見かたを提出した。これは、当時の教育界においても非常に新鮮であり、流俗の話ではなく、啓蒙的で世間をびっくりさせる言論であった。さもなければ、かれは「諸公は、この話を聞いて、恐らく私の言うことを外的の議論と思うかも知れない」と言うことはありえなかった。これは中国近代におけるもっとも早く現された教育方針に関する論述かどうかはいまここで判断しかねるが、それが中国教育思想史において貴重な価値を持っていることは、疑う余地がない。嚴復の足りないところは、このような論述を教育方針の原則的レベルに高めて、徳育、智育、体育の内包及びその三者の相互関係に関する解釈に、偏りがあったという点にある。

蔡元培は嚴復の教育思想を継承し、発展させた。かれは1912年に、南京臨時政府教育総長に就任してから、すぐ教育方針への研究に着手し、並びにこの方針を完全に述べた。かれは1912年2月に発表された『新教育に対する意見』の文のなかで「近頃、教育部で諸同人と新たに学校法令を起草し、高等教育会議を招集する予備活動については、すこぶる同志からの正論に恵まれたが、教育方針に関するものは殊に少なく、ここでは敢えて拙見を述べて先払いの声とし、海内外の教育家からの是正を頂ければ幸いである」(『蔡元培文集』教育巻上、台北錦繡出版事業株式有限会社、1995年5月版、78頁。以下、本文集によるすべての蔡元培言論の引用は、文集の巻名と頁数だけを注明する——作者という。この文章のなかで、蔡元培が中国古代と西洋の教育経験を総括し、考察して、批判的に清代において押し進められた忠君、尊孔、尚公、尚武、尚実という「所謂欽定教育宗旨」を研究し、始めて完全に学生の全面的な成長を育成する方針を提出した。即ち教育宗旨は軍国民教育、実利教育、公民道德教育、世界観教育と美育の五項目を取るべきであるとする。かれは「五つのものは、皆今日の教育には欠けてはならないものである」(『文集』教育巻、82頁)と言う。この五つのものの内包と相互関係については、かれは「軍国主義は体育とし、実利主義は智育とし、公民道德及び美育は皆德育に助け補うものとし、世界観は即ち三者を一つに統一するものである」(教育巻上、83頁)と解釈した。また「五つのものは公民道德を中堅とし、蓋し世界観及び美育は皆それを以て道德を達成し、しかも軍国民教育及び実利主義は、すなわち必ず道德を根本とする」(教育巻上、203頁)。ここでは蔡元培の新しい貢献をまとめてみると、次のようになる。第一に、かれは民国の教育方針に絡んで問題提出をした。かれはかつて「民国教育と君主時代の教育、その異なる点はどこにあるか。君主時代の教育方針は教育を受ける者自身から着想せずに、一人主義或いは一部の人主義を用いて、一つの方法を利用して、教育を受ける者をして、他の主義に歩み寄らせる。民国の教育方針は、教育を受けるもの自身から着想すべき、どんな能力を有して、始めてどんな責任を尽くすことが出来、どんな教育を受けて、始めてどんな能力を持つことができる」(教育巻上、202頁)。教育はある種の人間を育てる社会的活動であり、その本質属性は即ち人間の育成である。従ってどんな人間に養成するか、及び如何に養成するか、つまり育成の要求、基準と育成の方法、道、これらは即ち教育方針を定める時に考慮しなければならない問題である。蔡元培は「教育とは、人格を養成する事業である」(教育巻上、267頁)という。かれは学生の「完全な人格」、「即ち身体、心の両面において偏りがあるてはならないもの」を育成するには、必ず学生の徳、智、体の全面的成長を促さなければならない(教育巻上、364頁、272頁、365頁)と考えていたのであった。第二に、かれは、德育、智育、体育の外に、美育と世界観教育をも提起し、これはかれの一大発明であった。かれは「思想自由や言論自由の公例に従い、一流派の哲学や一宗門の教義を以て心を束縛するのではないが、ただいつも一つの実体のない、終始のない世界観を立てて目的とすべし。このような教育について、私にはこれを世界観教育と名付ける以外はない」(教育巻上、82頁)。蔡元培は非常に世界観、人生観の教育を重視している。かれは人々が広大で多様な世界に身を置いて、正確に世界を認識し、一つの正確な世界観を持たなければならないと考えていた。かれは「我々の一生をもって世界と較べると、その大と小、久と暫の相違は数量で計ることができない。しかも我々の一生は、いささかも世界の



外に出ることができない。故に我々は必ずまず一つの世界観を有しなければ、決して人生観を云々することができない」と言う。かれは「人生」が「世界進化の公例に合って」こそ、始めて「真の価値がある」と強調した（哲学巻、245頁）。蔡元培のこのような論述は、我々が正しい教育方針を制定し実行するのに対して、極めて啓発と指導の現実意味を有しているのである。

二、思想、文化、学術の存在と発展の客観的法則を提示した。1919年3月、蔡元培は林琴南に当てた返信において「学説では、世界各大学の通例を倣い、思想自由の原則に従い、兼容并包主義を取る。…どんな学派にしても、もしその論説が合理的で、それを堅持する理由があり、未だ自然的に淘汰する運命に達していなかったならば、たとえ互いに相反対であっても、悉くその自由の発展に任せるのである」（教育巻上、518頁）。「思想自由の原則に従い、兼容并包主義を取る」。これは、つまりよく人々に讃えられている蔡元培の有名な教育振興の主張、或いは教育振興の指導思想であった。それは思想、文化、学術の存在と発展の客観的法則を示し、深遠な意味を有しているのである。

周知のように、大学は各種の思想、文化、学術が集まるところであり、また思想を活性化し新たにし、文化や学術を繁栄し発展させる基地でもある。ここでは文化専制主義をし、百家を止めて、一術を独尊してはいけない。ましていかなる思想、文化、学術も強力を用いてそれを禁固し、或いはそれを消すことができない。それを禁固することができないので、それを消すこともできないのである。思想は只思想によって説得し、更新し、批判の武器は武器の批判に代わってはいかない。それを包容のなかに存在させ、相互比較やぶつかり合いを経て、自由に発展させ、或いは自然に淘汰させるしかない。包容は批判、競争を取り消すものではない。競争は発展の動力であって、包容は競争の前提である。包容がなければ、全てが一律になってしまつて、所謂競争を言うことができず、まして発展を言うことがさらに難しい。

蔡元培はこのように主張し、同時にこのように実践した。かれは大学は「悉く重要な研究成果を吸収し、様々な専門家を集める学府」であり、「多数の学生に時間通りに授業をして、一つ一つの卒業の資格を造ろうとするだけでなく、実は共同研究の学術の機関でもあり」（教育巻上、483～484頁）、故に「各方面の学説を網羅し」、「広く知識を有して以てその偏狭の意見を正さ」なければならないと考えていた。従つてかれは大いに新しい学者、例えば陳独秀、胡適、李大釗等という人物を招聘したのみならず、専門的な学識を持つ旧い人物、例えば奉鴻銘、黄季則、劉師培等の北京大学における教職の席をも保留していた。かれは「本学の教員の中に、辮髪を下げて復辟論を持つ者もいるが、しかしその担当はイギリス文学であり、政治と関わりがないので、追及しないことにした。籌安会の発起人は、清らかな議論では罪人とされるものである。本学の教員の中にそのような人がいるが、しかしその担当は古代文学であり、政治に関わりがないので、追及しないことにした」（教育巻上、518頁）。蔡元培は「教育は政治の流れの外に置かなければならないのである」（教育巻上、92頁）と主張し、即ち教育は政治の大潮流に従つて動くのではないと言う。これは実に輝かしい思想である。このような蔡元培の包容思想に押し進められて、五・四時期の北京大学は、大学の風格が変わらず、大学の中では、東西哲学の対峙と、文壇における異なる意見の自由合奏のできる協調的で寛容な雰囲気を実現して、様々な学術が一同に集まり、北京大学の振興のために決定的な役割を果たしただけでなく、

しかも中国近現代文化、学術の発展のためにも深刻な影響を与えている。

ある人は包容理解を、遅れた思想を包み、反動の観点を容れると解釈している。かれらはそれで、旧いものと反動的なものが世間に出回され、もろもろの思想的な妖怪が横行されるのを誘発してしまう恐れがあると考えて、それを継承し唱えるべきではないという。実はこれは消極的な誤解でなければ、左傾を行おうとする口実であり、説得力のないものである。というのは、蔡元培が指摘した包容とは、決して無原則的ではなく、それが主に進歩の思想のために道を開くのであって、遅れて反動のものに合法的な保護を提供するのではないからである。遅れて反動の思想が包容のなかで必ず進歩的、革命的な思想によって克服されるのであろう。五・四時期の北京大学学生で、後に南京国民政府重要人物になった羅家倫は、蔡元培がこのような包容思想を実践する状況をふり返って、蔡先生は「学術研究の自由を主張するが、しかし学術の名義を借りて、如何なる真理に違反する宣伝をするのも主張しない。主張しないのみならず、しかも反対する。… 經学教授のなかの新帝制派の劉師培先生が、一代の大師であり、しかし劉が教えたのは三禮、尚書と訓話であったが、決して一言も帝制を口にしたことがなかった。英文教授のなかに一人の海内外に知られた辜鴻銘先生がいて、古い復辟派であった。彼が教えたのはイギリス詩歌（かれはイギリスの詩歌を『外国大雅』、『外国小雅』、『外国国風』『洋離騷』等の類に分けたために、私は教室で一生懸命に笑いを抑えて、苦しかったが、本当はそれが大変気に入ったのであった）であったが、かつて一声も復辟を講義したことがなかった（羅家倫「蔡元培与北京大学」、『蔡元培先生全集』台湾出版、1968年、1452頁による）。包容思想を公然に言い触らした結果は、民主主義の大発展であり、封建復古思想の大衰退である。これは周知のところである。

三、教授によって大学を管理する体制を作ったこと。1912年、蔡元培は南京臨時政府教育総長を任ずる時、自ら主宰して制定した『大学令』のなかで、大学において評議会——教授会の組織を設けるべきことを規定した。1917年、かれは北京大学長に就任してから、この規定を完全に実施に移し、大学の最高立法機構と権力機構として、大学評議会を設立した。評議会は若干の評議員によって組織されて、評議員は教授に限り、大学のすべての教授から選挙によって生まれるのである。大学の各種の重要問題は、全部大学の評議会の民主的な討論を経て、決定し実行しなければならない。大学の評議会の下において各学部では選挙によって教授会を作り、各学部の事を責任を以て管理する。こうして大学と学部の二段階的教授管理体制を建立し、その後だんだん全国のその他の大学にも押し広めて、我が国の近代高等教育事業の発展を有効に押し進めたのである。教授によって大学を管理する体制には、合理的な部分があると言える。第一に、それが専門家による大学管理の原則を現した。大学は奥深い学問を研究するところであり、高級人材を育成するところである。主に学識のある教授たちによって管理されるのは、現実的であるし、理に叶うのである。教授という階層を除いて、学生或いはその他の方面の人々によって管理が行われると、大学は決して旨く管理できない。この点は既に「文革」の教訓によって証明されていた。第二に、それは民主的な大学管理の原則を現した。蔡元培は非常に民主精神に富んでいた。大学内の全ての重要事項について、かれは全部評議会の民主討論を経てから、決定し実施する。ここで一例を挙げよう。かれは北京大学長になってから、大学の全体

教職員をして「日常的に連絡し合い、意見を交換しあう機関を持たせ、かつそれを借りて我が大学の現状を全国教育界に報告させるため」（教育巻上、483頁）、我が国近代における一つのもっとも貴重な資料価値を持つ大学日刊『北京大学日刊』を創刊した。その後、かれはまた、同『日刊』が「規模の大きい学説を載せることができない」ので、よりよく思想、学术交流を進めるために、我が国近代における初めての大学学報——『北京大学月刊』を創刊した。当時、『月刊』の製版様式を巡って論争があった。新派教授と大部分の理科系教授は『月刊』では新文学体形式を採用し、白話（話言葉）で文章を書き、新式句点を用いて、左から右へと横書すべきだと主張した。しかし旧派人物がそれに反対した。かれらは、伝統の国学論文では、縦書きで製版すべきだと考え、双方とも譲らなかつた。蔡元培は広く意見を聞き、研究所主任による民主討論を通じて、裁決を決めた。即ち科学論文は、全て新文学体を取り、文学的な国学論文は、旧体文学形式を取る。これによって、旧派人物の希望をも満したのである。これについて、蔡元培は特別に一つの『啓示』を書いて、『日刊』に載せた。この『啓事』では「本学教授、講師諸先生公鑒：『月刊』の形式は、既に研究所主任会によって公式に決まって、全て横書きを用い、並びに句点等の記号を加えることになった。しかし諸先生のなかに、亦我が国の旧体文学では形式が改まると、面白さが全く無くなるという人がおり、私もその通りと思う。但し一冊の中において半分は横書き、左より右で、半分は縦書き、右より左となると、読者に不便を感じさせかねない。今諸先生と約束する。すべて科学的な性質の論文は、皆横書きをし、各研究所に送って、普通月刊に編入する。文学的な性質の論文は、縦書きせざるを得ないものがあれば、学長室に送って貰って、私によって臨時増刊として編集する」（北京大学日刊』1919年1月7日）と言う。この『啓事』から、蔡元培の民主的作風の一面を伺うことができる。一つの大学を管理するのに当たり、専門家の教授たちによって大学の重要事項を討論してから決定し、実行することは、素人の人が行政命令や上からの指示の伝達による管理より、ずっと有効的であろう。1949年以後、全国の大学では、教授による大学管理体制を、完全に誤ったもの乃至反動的なものと見なし、批判を加えたりして、教授たちに大学管理への参与に対する普遍的な消極心理を持たせた。これは大学教育の発展に資するものではなく、高等教育発展の現状にも合っていないのである。

以上の三つは、蔡元培の中国近代教育の改革における主な貢献であり、それで、全体的に中国近代教育発展の基本的な発想と枠組みを作り上げたのである。その外にかれは募集制度、科目設置等の教育プロセスの面においても、注目すべき改革と創新を行った。

四、女子学生を募集し、大学の男女共学の先鞭を付けた。二千年の封建制度の下に、中国の婦人には、教育を享受する権利がなく、まして男子と平等に教育を享受する権利がさらにない。民国初期後、女権の聲が高まり、女禁がだんだん緩み、中学校に傍聴する女子生徒が現れた。しかし大学は依然と男子学生の一統天下であった。五・四新文化運動のなかで、封建的禮教に対して猛烈な衝撃を与えた結果、社会的に女禁を開放し、女子学生を大学に招く呼び聲が甚だ高かった。ある女子知識青年は直接蔡元培に手紙を書いて、北京大学に率先して女禁を開いて、男女共学を実行するよう要請した。当時の北京大学の学生、後に国民党の著名な左派民主者になった王昆侖は、かつて蔡元培に対して自分の姉の北京大学入学を許可するよう要求した。こ

のような情勢の下に、蔡元培が時代の潮流に順応し、1920年元旦において、上海『中華新報』北京駐在の記者の問題に答えて、女禁を打開する有名な談話を発表した。かれは「大学における女禁を開く問題について、即ち余は特に言う必要がないと思う。というのは教育部の定めた規程には、大学の学生に対して、もともと男女の規定がなく、選挙法による選挙者とされているからである。且つ欧米諸国に照らして見ても、どこも男女を共に募集している。故に余は女禁を開くことは特に問題ではないと考えている。たとえば北京大学が来年募集する時、もし程度の相応しい女子学生がいれば、受験に応ずるべき、合格したら、亦取るべきである」。これは雷の轟音にはかならず、全国の津々浦々に響いていて、各種の新聞に広く報道されていたのである。それで、1920年に、北京大学はまず女子傍聴生を3名受入れ、秋になると、正式に本科女子学生を9名募集し、それぞれ哲学、英文、国文等の学部に入れて学ばせていたのである。影響の及ぶところで、その他の大学もどんどんこれに倣って、女子学生を募集しはじめ、始めて我が国において男女学生が同一の大学で勉強できない古いわくを打ち壊したのである。これは実に中国近代教育の改革における一つの壮挙であり、蔡元培の功績が大きいのである。

五、積極的に平民教育を倡える。これは蔡元培が中国近代教育に対して行った重要改革の一つである。かれは「貧しいために小使をするのが恥ではない。一つの大学のなかに職員と小使があり、同じく仕事であって、貴賤の別がないはずである」（書信巻上、433頁）と考えている。「以前は大学生しか大学の教育を受けられず、周りの人はみんなそれが出来ない。これは平等とは言えない」（教育巻、30頁）という。それで、かれは北京大学の学長をする任期内に、積極的に平民教育を提唱した。出身、資格を制限せず、各学部とも一定数の傍聴生を募集することができる。1918年、かれは北京大学校役夜班を開くことを主張し、小使たち二百人余りが学習に参加した。1920年、かれはまた北京大学学生会が平民夜学校を創設することを支持し、平民の子弟四百人余りを学校に入れた。これは我が国の在職成人教育の始まりと言える。夜学校の始める日に、蔡元培は自ら講演に臨んで、かれは「今日は北京大学学生会平民夜学校が始まる日であり、これは重大な意味を持つばかりでなく、北京大学が平民の入校を許した始めての日でもある。今までここではよその人の入校を拒んできたのである。現在、ここはどんな人でも入るようになった。以前、馬神廟の北京大学に一枚の扁額が掛けてある。それがまるで清時代の役所の前に立てられた木の札のように、人々がそれを見て皆ここが大学の重要な用地であって、無断で出入りしてはいけないと思われたに違いなかった。ここは全国の最高の学問の中心と見なされ、大学生と教職員しか入ることができなく、よその人はだれでも入るべからずと思われていたのであった。このような考えは、北京大学付近の人には、もっとも明らかであり、現在、この扁額はすでに撤去してもらった」という。「従来、京師大学堂の中の小使は、ただサラリーをいくら稼いで、大声で上のものに対してお辞儀をすれば、もの足りたが、現在の北京大学は小使のために、校役夜班を閑いた。かれらは夜当番でない時に、気儘に学習を求めることができる。従って大学の中の人、だれでも教育を受ける権利を持つようになった。しかし、大学の中の人、皆教育を受ける権利を有しただけでは未だ十分とは言えない。重要なのは全国の人々が皆このような権利を享受することだ」（教育巻下、30頁）。平民と勤労大衆の子弟をして、皆入学と教育を受ける権利を持たせることこそが、蔡元培の民主主義教育思想の精華

である。かれはこのように主張したのみならず、また同じように実践をし、深く北京大学の全体教職員の歓迎を受けたのである。1921年1月、蔡元培の夫人黄仲玉が亡くなり、北京大学の労働者たちに死者を哀悼する対句一枚を送って貰った。対句は日く「学堂を興すにあたり男女平等の権利を実行し、天下の婦人たちと共に模範を仰ごうと願う。大学者の旦那様が労働者の神聖を鼓吹し、学校の一人前の労働者だったら、みんな早く来てお辞儀をしてお礼を言おう」（『晨报』1921年2月1日）という。これは北京大学の労働者たちの蔡元培に対する尊敬と敬愛を現している。蔡元培のこのような平民教育思想の指導の下に、五・四時期の北大学生で、後に有名な共産党員になった鄧中夏と後に著名な民主主義者になった許德珩、楊鐘健等は、平民教育講演団を發起し、成立させて、北京市民と郊外の労働者農民の中に行って宣伝と講演をして、文化知識を伝播し、政治的自覚を啓発して、五・四愛国運動のために重要な準備をしたのである。その時以降、中国近代教育の発展過程において、その内包と表現形式が時に変化があったにせよ、終始平民主義の伝統を保持してきていた。蔡元培によるところが大きいと言える。

六、北京大学における初めてのマルクス・レーニン主義の理論課程の開設を許可した。マルクス・レーニン主義は、西学の一つとして、十九世紀末からすでに中国に伝大した。但し中国に広く伝播し、一つの思想文化の激流を成したのが、五・四運動以後である。当時の北京大学が一つの伝播センターとなり、時に北京大学学長に当たる蔡元培が明確にこのような伝播を支持した。当時北洋軍閥と北京政府はマルクス主義学説を敵視していて、これを洪水や野獣のように見なし、厳しく取締って、明確に禁止した。しかし蔡元培がリードした北京大学では、学生は自由に組織を造り、自由に研究することができるのみならず、正式な科目としても講義し試験した。これは勇気の要ることであって、充分に蔡元培の達見と胆力を示していた。五・四運動以降間もなく、李大釗は経済、史学、政治等の学部において、『唯物史観』『労働者の国際運動と社会主義の将来』等のマルクス主義理論課程を開設し、その後、政治学部教授陳啓修、高一涵等もこの動きに参加してきて、マルクス・レーニン主義の理論課程関係を講義した。蔡元培はマルクス・レーニン主義を信仰しない。しかしかれはずっとマルクス・レーニン主義研究を主張する。かれはかつて「今の人は中国共産党を反対するが故に、敢えてソビエトを言おうとせず、レーニンを言おうとせず、至ってマルクスを言おうとしない。これは誤解である。われわれが中国共産党の由来を研究するには、マルクスのことに逆上らなければならない。しかしマルクスを研究するには、必ずしも中国共産党<?>に関わらなければならないことはない。且つ研究が盲従とは違う。マルクスを研究して、必ずしもマルクスを信仰しなければならないことはない（政治経済巻、511頁）。かれの一種の客観的な学者の態度を現した。「五・四」以後、北京大学はマルクス・レーニン主義思潮が長期にわたって生い繁ってやまない基地となっており、並びに全国に影響を及ぼしたのも、蔡元培の施行した教育方針を離れては考えられないのである。

七、初めて戯曲、小説、音楽、絵画を大学の講義に入れた。蔡元培が北京大学学長をする前に、中国の長い教育、学術の歴史の中において、戯曲、小説、音楽、絵画は、些細な技巧と見なされ、学校教育という上品な場所に出不入のものであった。戯曲小説を専攻した近代の馬隅卿（兄の馬幼漁、馬叔平は、かつてそれぞれ北京大学国文学部主任、北京故宮博物院長を任ず



る)は、かつて自分の蔵書を「不登大雅文庫」(上品な場所に出せない文庫)(『知堂回想録』香港三育図書有限公司、1980年、370頁)と称した。魯迅は「中国の小説には、もともと史がない」(『魯迅全集』人民文学出版社、1957年、4頁)という。蔡元培が北京大学学長になってから、まず伝統の旧い説に反対して、大いに美感教育、芸術教育を唱えた。1917年、かれは『宗教説の代わりに美育を』という講演をし、「科学、美術は同時に新教育の要綱たること」(美育卷、77頁)を指摘した。かれのこうした思想の指導の下に、戯曲、小説、音楽、絵画等が、始めて北京大学の講壇に受け入れられた。五・四前後、かれは呉梅(瞿安)、許守白(之衡)を戯曲の講義に、魯迅を小説史略の講義に、蕭友梅、劉天華を音楽の講義に、陳衡恪(師曾)、徐悲鴻を絵画の講義に招聘して、並びに相先後して音楽研究会、音楽伝習所、画法研究会を作り、積極的に練習するように学生を組織して、これらの芸術を正式な学問として大学の講壇に持ち込んだのである。その影響は大きかった。当時社会上の悪勢力と一部の旧派人物は、デマをでっち上げ、「教室のなかで京劇の曲を歌っている」とか、『金瓶梅』を教科書として使っている」等と言って、北大を恣意的に攻撃し、大いに氣勢を上げている。しかし蔡元培は全然これを気にもしなかった。かれは魯迅を小説史略の講義に招聘して、根本的に小説の文学史上における命運を改め、大いに小説の文学のなかの地位を変えたのである。それから、小説に対する研究は、殆ど文学の正統となった。これらのことは近代中国の文学、芸術教育の発展に対して、皆開拓的な意味を有しているのである。

八、学制を改革し、科目選択制、単位制を実行した。蔡元培は教育が「自然を尚び、個性を広げる」べくとし、「既成の法を守り、均一を求める」ことを反対した。生徒の素質によって教育を施し、高いレベルの研究人材を養成することを主張した。かれは「大学は卒業を販売する機関ではなく、固定の知識を積み込む機関でもなく、学問を研究する機関である(教育巻上、559頁)。大学の学問を研究し、高級人材を育てる目的を実現するために、「五・四」の前後、蔡元培が次々と学制に対して改革を行った。かれは文、理両科を基礎とする総合大学を目指し、研究所を作るべきだと指摘した。「研究所はドイツとアメリカの Seminar の方法に倣って、一つの専門知識を専攻する所とされる」(教育巻下、50頁)。当時北京大学には既に国学、外国文学、社会科学、自然科学等の四つの研究所を設けているのである。同時に門を廃止して学部に変更、各学部教授会を作り、文・理各科の学長を取消し、教務長を設けて、全大学の教育活動を統一して管理し、並びに著名の学者馬寅初を北京大学の第一任教務長に招聘した。学生の育成に対して科目選択制、単位制を実行し、学生が本学部に設けた科目を修めるばかりでなく、教員の指導の下で、関係学部の科目を選択して修めることもできる。学部生が80単位を満たすと卒業できる。このような改革は学生の学習の主動性を誘い出し、高度な学問を研究させ、人材の成長を促進した。1922年以後、全国の各大学が一斉にこの方法に倣い、広く影響を及ぼしたのである。

以上取り上げた八つの事は、蔡元培が教育分野に行った開拓的で重大な改革措置である。しかしこれは未だ蔡元培の改革措置の全部を含んだとはいえない。蔡元培にはまだ更に研究されるべき教育思想をいくつか持っていた。例えばかれは「教育とは、過去のために非ず、現在のために非ず、専ら将来のためにある」(教育巻上、203頁)とか、「教育は種を播く事業であっ

て、「将来の文化を担う」（教育巻上、267頁）働きを持つという。これは今日のわれわれは教育が未来に向かい、教育が人類文化の社会的遺産システムであると言うのと、合い通じているのである。これは蔡元培の遠い見通しと高い識見を示していたのである。要するに、蔡元培はさすがに中国近現代歴史上におけるもっとも偉大な教育家であり、かれの教育思想と改革措置は、我が国の教育事業の近代化、現代化のために基礎を築いたのみならず、しかも有力的に我が国の全体的な国づくりの近代化と現代化を促進した。これは一つの歴史的な高くて大きな碑として、永遠にわれわれの敬慕と記念に値するであろう。

## = 中国語訳 =

### 蔡元培と近代中国の教育改革（提綱）

蔡元培是中国現代的巨大人物。他既是教育家。還是革命家、又是思想家。中国古代对人的評價有“三不朽”之說、蔡元培就是符合三不朽標準的偉人。

蔡元培一生的經歷主要是在教育、學術方面、其建樹也主要在教育學術方面、因此、他主要是一位教育家、而且是一位最偉大的教育家。如果說中国古代最偉大的教育家是孔子、那麼、中国近現代最偉大的教育家就是蔡元培。蔡元培是把中国的教育从古代帶入近代的最偉大先驅者。今僅就其改革举措之犖々大者、介述如次。

#### 一、

首次提出培養学生全面發展的教育方針。1912年蔡元培就任南京政府教育總長時提出。教育宗旨宜采用軍国民教育、實利教育、公民道德教育、世界觀教育和美育五項。他說。“五者、皆今日之教育的不可偏廢者也”他解釋說：“軍国民主義為体育、實利主義為智育公民道德及美育皆毘德育、而世界觀則統三者而一之”。蔡元培以為教育是養成人格之事業、要養成学生“完全之人格”則于身、心兩方面決不可偏廢、這就必須培養学生德、智体全面友發展。蔡元培的論述、对手我們制定和執行正確的教育方針、亟具啓迪和現突指導意義。

#### 二、

揭示了思想、文化、學術存在和發展的客觀法則。一九一九年三月、蔡元培在答林琴南信中提出：“对于学院、仿世界各大学通例、循思想自由原則、取兼容並包主義。…無論何種学派、苟其言之成理、持之有故、尚不達自然淘汰之運命者、雖彼此相反、而悉聽其自由發展”。“循思想自由原則、取兼容並包主義”、這就是蔡元培的著名弁学指導思想、它揭示了思想、文化、學術存在和發展的客觀法則、有深遠意義。

#### 三、

建立教授治校体制。一九一二年蔡元培在所主持制定的《大学會》中、就規定了大学要設評議會—教授會的組織、實行教授治校。一九一七年他就任北京大学校長后、把這一規定付諸實施。校評議會是学校的最高立法機構和權力機構、評議員必須是教授、由選舉產生。学校的各種大事、都必須經校評議會民主討論、決策施行。各系成立教授會、在校評議會領導下、治理各系。教授治校体制符合專家弁学和民主弁学的原則、有其合理因素。以後逐漸推广到全国其他高校、对我



国教育的近代化、起過積極作用。一九四九年后把這種体制視為完全錯誤、甚至反動的東西、加以徹底批判、并不符合中国近代教育發展的實際。

#### 四、

招收女生、開大学男女同校之先河。五四新文化運動對封建礼教進行了猛烈冲擊、其時開放女禁、招收女生入大学的呼声甚高。一九二〇年元旦、蔡元培在答《中華新報》記者問中、發表了打開女禁的著名談話。他說“大学之開女禁問題、則余以為不必有所表示。因為教育部所定規程、对于大学々生、本无男女之規定、如選舉法之選舉者。且稽諸欧美各国、无不男女并收。故余以為无開女禁与否之問題、即如北京大学明年招生時、倘有程度相合之女生、尽可招考、如程度及格、亦可錄取也”。這不啻是一声惊雷、響徹了全国大地。此后、北大即先后招收旁聽女生錄取本科女生、分別入国文、英文、哲学等系學習。影響所及、其他高校、群起仿效。這實是中国近代教育改革的一個創舉、蔡元培功莫大焉。

#### 五、

積極倡導平民教育。蔡元培認為教育應該是平等的、每个人都有受教育的權利。他說：“从前只有大学生可受大学的教育、旁人都不能够、這便算不得平等”。于是、他在任北大校長期內、着手創辦了北大校役夜班和北大平民夜校、有几百校役和平民子弟入校。這是我國在職成人教育之濫觴、且開辟了教育的平民主義傳統、有重大意義。

#### 六、

准許北大首次開設馬列主義理論課程。北京大学是我國最早傳播馬克思列寧主義的一個中心、這與蔡元培開明的教育思想和支持分不開。蔡元培并不信仰馬克思主義、但却堅決支持研究馬克思主義。五四前后、李大釗、陳啓修、高一涵等在蔡元培包容思想的保護下相繼開設了馬列主義的理論課。馬列主義發展成一股思想激流、其于中国近現代社会政治影響之深遠、是眾所周知的。

#### 七、

把戲曲、小說、音樂、繪画首次引進大学課堂。在中国古代傳統教育中、戲曲、小說、音樂、繪画、是被視為雕虫小技、而為碩学名儒所不屑為的。它們不列教育正宗、難登大雅之堂。但蔡元培一反傳統旧習、他出任北大校長后、先后聘請吳瞿安、許之衡講授戲曲、魯迅講授小說史略、蕭友梅、劉天華講授音樂、陳師曾、徐悲鴻講授繪画、把這几門藝術正式搬上了大学的講壇。這对于中国近現代文学、藝術教育的發展、產生了破天荒的開拓作用。

#### 八、

改革学制、实行選科制、学分制。蔡元培主強大学要因材施教、培養高層次的研究人才。他認為教育應“尚自然、展个性”、反对“守成法、求利一”。他仿效德国弁大学的体制、主張發展以文、理兩科為基礎的綜合大学、設研究所、实行選科制、学分制、学生除修必修課外、還可跨系選修相關課程、以擴大知識面、發展偏好。他在任北大校長期內、進行了学制改革、大々調動了乃學生學習的主動性、教師授課的積極性、把北大弁成了一座学风既嚴又生動活潑的著名学府。

以上所举八事、是蔡之培在教育領域中具有開創性的重大改革措施。它不僅僅為我國教育事業的近代化、現代化、奠定了基礎、而且也有力地促進了我國整体建設事業的近代化和現代化。